

学級会活動（事前指導）の評価

足利市立柳原小学校特活研究部

I ま え が き

「学級会の問題（議題）が多くの児童から集まらない」……言いふるされていて、現在でもあまり解決の決め手がない問題である。

そこで、本校の特活研究部（各学年担任から選出された7名で構成）では、解決の糸口にもとを考え、「学級会活動の評価」というものに本年度からとりこんでみた。

活動をチェックし、評価し、それをもとに反省することにより、よりよい活動が期待できる。そしてそのことが学級会活動の問題が多くの児童から集まる一つの解決策となるのではないかと考えたわけである。

以下その経過と内容をしるし、ご指導を願いたいとおもう。

II 評価のねらい

生活一般目標 → 指導計画 → 実施計画となるわけであるが、実施計画は学校、学級など児童の実態により、さまざまであるので指導のねらいを客観化するのはむずかしい。したがって、評価が客観的にできない。そこでより指導のねらいを具体化し、明確にし、それに応じた適切な評価の方法を定着させるべきである。

III 評価後の予想

活動をチェックし、評価し、それをもとに反省することにより、よりよい活動が期待できる。そしてそのことが学級会活動の問題が多くの児童から集まることに通ずるのではないか。またこのことがひいては、当然より活発な「学級会活動」をうながす基になるものとおもう。

IV 研究計画

○ 43年度……事前指導（プログラム委員会が中心）の評価着眼点作成

評価について指導主事の指導 → 評価着眼点の原案作成 → 部員担任学級で実際に評定・反省 → 指導主事の指導 → 全職員にアンケート → 原案修正 → 44年度より全学級で評定

○ 44年度……学級会活動時の評価着眼点作成

○ 45年度……事後指導の評価着眼点作成

3か年計画の「学級会活動の評価」で初年度は、最初の事前指導（プログラム委員会中心）の評価着眼点を作成することにした。

いまさら説明するまでもなく、学級会活動において、プログラム委員会の重要性は論をまたない。現在本校においても、「学級会活動」が成立するためには、その事前指導（プログラム委員会が中心）がなされなければならない。事前指導がない「学級会活動」は考えられない。といったところ

まで、学級担任の意識はアンケートにもみられるように向上してきておる。しかし、そのプログラム委員会の活動内容は、「どこを」「どのような順序で」「どのようにおさえて」指導したらよいかという点になると、暗中摸索といったところがほとんどではないかとおもう。

そこで本年度は研究計画にも示した通り、学級会活動のうちその事前指導をとらえて、その活動内容を分析精選して、次の5段階とした。

- ① 問題を見つける
- ② 問題を処理する
- ③ 議題をきめる
- ④ 問題解決の計画をたてる
- ⑤ 問題解決の意欲を高める

以上事前指導の活動内容や過程を明示することにより、プログラム委員会の活動内容を明確にし、学級担任が自信を持って事前指導がなされるような基を作成した。そしてこれが「学級会活動」がよりのぞましい方向にむかう一つの有力な手がかりになるとおもう。

V 着眼点作成の基本的態度

- 低学年 → 教師が評定する。
- 中高学年 → 児童に評定させる。
- たれでも簡単に評定できるもの。
- 評価がすぐ次の指導、活動に役だつもの。
- いくつかの評価の要素のうち、本校の実態を調査し、問題点としてのこったもののみを整理し、いくつかの点について評価する。

例えば、プログラム委員会活動過程最初の「問題（議題）を見つける」の場合を考えてみる。

問題が提出される場として、かって文部省の実験学校では次のように報告している。

「始業時の話し合い」「各種の記録」「児童生活の活動から」「学級ポスト」「教師」「係り」「その他」以上であるが、これを全部とりあげて評定することは繁雑であり困難である。そこで本校の実態から評価の着眼点として例えば中学年では、「まい日のはんせい会や、学級日記などからもんだいを見つけるか」というように、いくつかの要素のうち本校としてもっとも問題点と思われるものに焦点をしぼったのである。

また要素の焦点化だけでなく、例えば「充実した係り活動」があらたな学級会の議題となるような問題を提起するのではないかの予想のもとに、各学年とも評価の着眼点として、「係りのしごとを進んでいるか」という項目を「問題を見つける」の中につけ加えた。

VI 着眼点原案評定後の反省

原案について、研究部担任学級（各学年1名）で、各10回評定した後、反省会を開いた。その話し合いの要旨は次の通りである。

◇ 低 学 年（省略）

◇ 中 学 年

- 反省表によって、評定規準が明示（具体表現化）されたため、児童の活動のめあてができた。そしてそれにより当然のごとく活動の焦点化がなされた。

- 活動の順序①～⑤と示されているため、プログラム委員会にかかる時間が能率的になり短縮された。
- 評定する事項がかなり多くあるのに、それがわずか2～3の事項にまとめられているため、やや抽象的な表現になっているさらいがある。そのためどの点をとらえて評定するのかわかりしない。できれば最初はもっとも重要な問題だけとりあげることにして、何を評定するかということを明確にする必要がある。
- 抽象的な表現であると、児童がこれを評定する場合ほとんど教師の助言がなければできないことになる。児童でもよく理解できる事項がより具体的に表現され、また評定規準も明示される必要がある。

◇ 高 学 年 (省略)

以上であるが全学年を通じてみると、

○良好な点

- ①プログラム委員会の運営がスムーズになった。
- ②積極的に問題を見つけようとする態度があらわれた。

○問題点

どのていどが「よい」「ふつう」「わるい」かわかりしない。……(この点については、各学級で評定の尺度を児童たちと作成することによりあるていど解決した。)

VII 学級会活動の評価の現状と問題について

この点について、本校の実情を調査によって明確にしてみると、調査Ⅰ～調査Ⅵのようになってくる。この調査は、本校の全学級担任者(低学年10名、中学年9名、高学年10名、合計29名)で昭和44年2月3日に調査した結果の集計である。

調査Ⅰ あなたは意図的に学級会活動の評価をしていますか。

区分 \ 学年	低	中	高	全 体
やっている	8	5	6	19
やっていない	2	4	4	10

調査Ⅱ 現在までにやったことのある評価の方法を書いてください。(重複あり)

区分 \ 学年	低	中	高	全体	区分 \ 学年	低	中	高	全体	区分 \ 学年	低	中	高	全体
自己評価	0	2	1	3	教師の観察記録	4	5	5	14	日 記	1	0	2	3
相互評価	3	3	6	12	反省記録	4	5	9	18	その他	1	0	0	1
チェックリスト	2	3	2	7		1	0	0	1	無記入	1	0	0	1

調査Ⅲ 学級会における評価について問題点があれば書いてください。(重複あり)

区 分 \ 学 年	低	中	高	全 体
評価規準がない	4	3	3	10
実践活動の評価がむずかしい	1	4	6	11
客観的でなく主観的になりやすい	3	2	3	8

プログラム委員会について

調査Ⅳ プログラム委員会は定期的にもたれていますか。

区分 \ 学年	低	中	高	全 体
もたれている	8	9	8	25
もたれていない	2	0	2	4

調査V 学級担任としてあなたは、プログラム委員会に出席していますか。

区分 \ 学年	低	中	高	全体
出席している	6	1	0	7
ときどき出席している	1	8	6	15
ほとんど出席してない	1	0	4	5
無記入	2	0	0	2

調査VI 事前指導（プログラム委員会活動が中心）の活動過程を次の5段階にわけ、それぞれについて、問題点をあげてください。

① 問題を見つける

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ あまり問題がでない。 ○ 文章表記のできない者がある。 ○ どれも問題になるかわからない者もある。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題が少くない。 ○ 学級会でどうしても解決しなければならぬような問題が少ない。 ○ 問題がかたよる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自主的に問題が集まらない。 ○ 問題に新鮮さが無い。 ○ 問題がかたよる。
全	問題が集まらない。

② 問題进行处理する

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 処理をわすれることがある。 ○ 処理するほど問題がない。 ○ 教師の指導がないとできない。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 能率的処理ができない。 ○ 処理されたものが、あとでとりあげられないことが多い。 ○ なっとくのいくところまでいかない。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 処理するほど問題がない。 ○ 処理の場をきめても実行できない。 ○ 未処理のものが多い。
全	処理後の適正を欠く。

③ 議題を決定する

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分につどうのよい議題を主張する。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 議題選定規準が、よくわかっていない。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 男女により好みがちがう。 ○ 共通問題にしぼるのに困難である。 ○ 抽象的な議題になりやすい。
全	<ul style="list-style-type: none"> ○ 議題選定規準が身につけていない。

④ 問題解決の計画をたてる。

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師中心になりがちである。 ○ 実施計画のサンプルがないので計画しにくい。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童だけではふじゅうぶんである。 ○ 放課後の時間不足で完全なものができない。 ○ ひとつの型にはまって、いつも同じようなものになってしまう。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 時間不足で具体的なものがたてられない。 ○ 計画が簡単で雑である。
全	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師中心になりがち(低・中学年) ○ 時間不足(中・高学年)

⑤ 問題解決の意欲を高める

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 掲示してもあまり児童が関心を持たない。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 掲示方法がマンネリ化している。 ○ 計画の全容でなく議題名ぐらいになりがちである。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 予告から学級会までの日数がたりない。 ○ 掲示がおくれ、場あたりのなことが多い。 ○ 各自であらかじめ考えておくような掲示の方法ができていない。
全	<ul style="list-style-type: none"> ○ 掲示方法に新鮮味がない。 ○ 予告から学級会までの日数不足。

以上であるがこれによってみると、本校における学級会活動の評価は

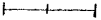
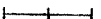
- なんらかの方法で意図的に評価している学級が半数をこえる。
- 評価規準の設定（観点の作成）が困難で、また評価が主観的にしやすい。
- 事前指導では
 - ・問題が集まらない。 ・処理後の適正に欠ける。 ・議題選定基準が身につけていない。
 - ・実施計画を作成させる時間に不足する。 ・予告から学級会までの日数不足。

VIII 学級プログラム委員会反省表

年度当初研究部員で作成した「評価の原案」について、その原案を使用して部員担任学級で評定し、それをもとにした反省結果と、全職員に対する、学級会活動の評価の現状と問題点についてのアンケートなど、諸調査について研究部員で検討を加え、プログラム委員会活動の評価を「学級プログラム委員会反省表」としてまとめたものが次のものである。

月 日 第 回 学級プログラム委員会反省表 議題「 」 年 組 記録者

活動過程	低 学 年	中 学 年	高 学 年	よ い ふ ろ い
①問題 をみ つけ る	<ul style="list-style-type: none"> ○教師といっしょに喜んで学級の仕事をしているか ○教師は児童といっしょに話し合いながら、児童の持っている問題をつかめたか ○多くの児童から集めることができたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○係りのしごとをすすんでしているか ○まい日のはんせい会や、学級日記などからもんだいをみつけているか ○おおくの人たちから、もんだいがだされたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○学級のしごとを進んでしているか。 ○朝や、帰りの話し合いで、全体やグループの相談からじぶんたちで問題をつかめたか。 ○多くの人たちから、問題がだされたか 	<p>┌──┴──┐</p> <p>┌──┴──┐</p> <p>┌──┴──┐</p>
②問題 を処 理す る	<ul style="list-style-type: none"> ○適当な議題が見分けられるような指導をしたか ○のこった問題をどのような場で解決したらよいか指導できたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○ぎだいあんとならなかったもんだいを、いどこでかいけつするかきめることができたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○議題にならなかった問題に、なっとくのいくような解決の場をあたえたか ○問題の処理がじぶんたちでできたか 	<p>┌──┴──┐</p> <p>┌──┴──┐</p>
③議 題を きめ る	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなの問題として選ぶよう指導できたか ○自分たちに関係のある議題であることに気づくように指導がなされたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○じぶんたちでかいけつできるかどうかよそをたてながらぎだいをきめたか ○ぎだいをじぶんたちの手できめることができたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○のぞましい議題が決定されたか ○議題決定が、じぶんたちの手でなされたか 	<p>┌──┴──┐</p> <p>┌──┴──┐</p>
④問 題解 決の 計 画を たて る	<ul style="list-style-type: none"> ○会の進め方について計画をたてられるような指導をしたか（2年のみ） ○必要な係りがきめられるような指導をしたか 	<ul style="list-style-type: none"> ○なんのために、何を、どのように話し合ってもらいたいか、みんなにわかりやすいいあん理由ができたか ○はなしあいのじゅんじょがきめられたか（3年のみ） ○じっし計画がたてられたか（4年のみ） 	<ul style="list-style-type: none"> ○なんのために、何を、どのように話し合ってもらいたいか、みんなにわかりやすい提案理由ができたか ○みんなで協力して、実施計画がたてられたか。 	<p>┌──┴──┐</p> <p>┌──┴──┐</p>

⑤ 問題 解決 の 準備	<input type="checkbox"/> 全員に解決する問題がよくわかるように指導したか <input type="checkbox"/> よろこんで準備できるように指導したか	<input type="checkbox"/> けいじ板や、はんせい会などをりょうして、ぜん員にしらせたか <input type="checkbox"/> きめられた日までにしらせたか	事前に効果的に全員にしらせることができたか <input type="checkbox"/> じぶんたち学級の問題として、解決しようとしてその準備がなされたか	 
はんせい				

この「学級プログラム委員会反省表」は、先にも述べたが、その目的は、

- ① プログラム委員会の活動過程を段階的に示すことにより、プログラム委員会の活動内容を明確化する。
- ② プログラム委員会の活動内容を項目ごとにチェックし、評価し反省することにより、よりよいプログラム委員会の活動をうながし、ひいては学級会活動を活発にする原動力にする。

であり、プログラム委員会活動中および活動後に、低学年では教師が、中・高学年では児童の手によりそれぞれ評価反省を行なうわけである。

なお評価の方法は反省表の項目ごとに、右端にある「よい」「ふつう」「わるい」の—|—の部分に○印をつけて評定していくことにしている。

IX 評 定 尺 度

部員の学級での評定後の反省として提出された「どのていどが よい・ふつう・わるい かがはつきりしない」という問題の解決策として、各学級ごとに児童と教師が、それぞれの学級の実態に応じて、評定尺度を作成することにした。これは、あくまで学級の実態に応じた尺度であるから、同程度のことであってもある学級では「よい」と評定し、他の学級では「ふつう」と評定する場合も当然でてくる。しかしある一学級にかぎってみれば、評価の規準がいつも一定しており、ある程度一貫性をもたせることができると思う。

次に中学年の評定尺度を、その例としてあげてみる。この評定尺度は、前記の「学級プログラム委員会反省表」の各項目ごとに対比させて作成してある。例えば反省表の「①問題をみつける」の中学年最初の「係りのしごとをすすんでしているか」についてみると、このクラスでは、学級全体で10の係りがあるが、10の係りがきちんとやっていると「よい」に○印をつけ、10のうち6つの係り以上がきちんとやっている場合は、「ふつう」に○印をつけ評定するという具合である。

なお評定尺度の考え方であるが、さきあげた「学級プログラム委員会反省表」の評価項目とことなり、これは年間をとおして固定させておくべきものとは考えていない。つまり学年当初は、さきほどの「係り」でいえば10の係りのうち7つ以上活動しておれば「よい」とし、経験をつんだ2学期には8つ以上そして3学期には「10の係りがきちんとやっている」場合に「よい」と評定するといったように、学期単位ぐらいに評定尺度の基準を各項目ごとにその達成度に応じて、児童と話し合いながら手をおして、たえずより上の段階にむかって努力するということが望ましいと考えている。